

古事記を読む会 29号 (2017, 5, 7)



呉羽山は新緑に包まれ、若葉や薫る五月となりました。

本日は、長く待つて頂いた服部先生に「常世の国から持ち帰ったもの」をテーマにお話しいただきます。

前回講話頂いた藤田富士夫先生からは、連絡がありました。また、イズミさんのブログ(いたち川散歩)に書かれていたことを紹介いたします。

新しい年度が始まり、いよいよ始動といったところです。それぞれ、爽やかな風を受け元気に活動致しましょう。

4月2日(日)午前、茶屋町の豊栄稲荷神社で**古事記を読む会**の研修会があり、**藤田富士夫**さんの講話をきかせていただきました。第1部、**太安万侶と『古事記』**。第2部、**八千矛神の歌物語**。講話のあと、藤田さんをかこんでの**昼食会**となりました。(いたち川散歩より)

藤田富士夫阿先生から

いつも整わない不十分なものをお話したものと後悔しております。お許してください。

なお、その折、「天皇は火葬されないのでは」とのご質問があり、具体例を示せないでおりましたが、調べてみましたところ「持統天皇以降では41人の天皇が火葬され、土葬は室町時代から定着したとされています。」この事、次回の会にでもお伝え頂ければ幸いです。

◆オホとスクナのナヅとき 【イズミさんのブログより】

4月2日、古事記を読む会の研修会では、藤田富士夫さんから「太安万侶と『古事記』」「八千矛神の歌物語」など、貴重なお話をきかせていただき、よい勉強になりました。その感想もいろいろありますが、ザンネンながら時間がありません。カネガネ考えていることを、ひとことだけ申しあげます。

『古事記』は**漢文調**で書かれた「**地の文**」と**万葉カナ**で書かれた「**歌謡**」の部分との合作になっています。当時はモジといえば漢字だけの時代。漢字は漢民族のコトバを表わすために考案された**表意モジ**文字なので、漢語を記録するには便利ですが、ヤマトコトバの音韻組織は漢語とはちがうので、漢字だけで意味を表わしつくすことができません。とりわけ助詞(テニヲハ)の用法などがそうです。そこで、表意モジの漢字を**表音モジ**として使う「万葉カナ」方式が考案されたわけです。

『古事記』では合計112篇、うち「八千矛神の歌物語」だけで5編(No. 2~5)の歌謡が採用されています。すべて**表音モジ**で記録されているので、ヤマトコトバの**音韻研究資料**として**第一級**の貴重な資料です。

たとえば漢字[命]の漢語音は上古音 mieng 現代音 ming だけで、あきらかに典型的な m-k 音語だとわかりますが、日本語の文脈ではイノチともミコトとも読まれます。「大国主命」の[命]がイノチではなくミコトと読まれるのはなぜか?それは、歌謡の中でミコト[美許等・美許登]・イノチ[伊能知]など、万葉カナで書き分けられていることがキメテになっています。それからもう一つ。『古事記』の記事の中には、ヤマトコトバの**語源解説**その

もの、あるいは語源解釈のヒントになるものがゴマンとつまっています。その典型的な例の一つが、オホクニヌシの**オホ**とスクナヒコナの**スクナ**との対応関係です。

人間関係としては、大国主命（神）が一国の王者で、少彦名神が外来の協力者ということのようです。ただし、国土開発や経営の面でみれば、大国主はその名のとおり**大地主**で**保守派**。少彦名は**先進的技術**をもたらす**スケツト**〔助人〕で**改革派**。それまでの「**ツキボウ**〔突棒〕で穴をほり、種イモを埋める」、あるいは「焼き畑」農耕中心だった生活が、**スキ**〔鋤〕（鉄利器）で地面を**スキ**おこし、より**スクナイ**労力でより**オホク**〔大・多〕の食糧を収穫できるように改善された。日本列島改造のご先祖様みたいな存在でした。

音韻の面から、**スク・スクナの意味・用法**を整理してみましょう。上代語としてサク〔咲・開・割・裂・放・離〕・シク〔敷・布・及〕・スク〔鋤・助・漉・送・次〕・スグ〔過〕・セク〔塞〕・ソク〔退・除〕などの s-k 2 音節動詞が成立しており、そのまわりにたくさんの名詞・動詞・形容詞などが組織されています。スクナは、もと「**スク**〔鋤〕+**ナ**〔刃〕」の構造で、「**スク**〔鋤〕**ためのナ**（道具・利器）」を意味するコトバでした。

オホは a-p 音タイプのコトバということになりますが、上代 2 音節動詞としてアフ〔逢・会・合・和・敢・堪・饗〕・イフ〔言〕・オフ〔覆・負・追・逐・生〕・オブ〔佩・帯〕・ユフ〔結〕・ヨブ〔呼〕・ワブ〔侘〕・エフ〔酔〕・ヲフ〔終〕などが成立しています。

（以下、結論だけいいます） 上代語に**オフ**〔白貝〕の用例が見られることに注目します。『上代編』の解説に「貝の名。**ハマグリ**〔蛤〕の大きなものか、というが、未詳」とあります。現代とちがって、ハマグリなどの貝は**主食にちかい食料資源**であり、また食品などの**容器、工芸品**、さらには**通貨**の役割をはたした例もあります。そのまま**地名**ともなっていたようです。ハマグリなどのカヒ〔貝〕がオフとよばれるようになったのは**なぜか**？それは、「カヒの身が**カヒガラ**を**オフ**〔負〕**姿**だからです。**オフ**〔負〕姿は、**オブ**〔佩・帯〕姿ともいえます。視点を換えれば、「カヒガラがカヒの身を**オホフ**」姿となります。「覆いつくす」姿は、カヒの身に比べてカヒガラのほうが「**より大きい**」姿。そこで、**具象的な名詞**オフ〔白貝〕や**動詞**オフ〔覆・負・追〕から**抽象的な形状言**オホ〔凡・大〕が生まれたと推定されます。

以上、勉強不足のまま、粗雑な提案になりましたが、ご教示をお願いします。

音韻研究や語源解釈に大いに役立っている『古事記』。言葉について、浅学な私達にいつも多くのことを教えていただいています。まだまだ不消化ですので、何度でも教えてください。（俊）

今後の予定

5月7日 服部征雄氏 「常世の国から持ち帰ったもの」

6月4日 イズミ氏 7月2日

9月3日 藤田先生の第2回
「久米歌と三輪の大物主」

以降の提案希望者募集!! 10月1日、11月5日、12月3日

訃報 イズミさんの奥様（信子様）が、4月末日にお亡くなりになりました。

心よりお悔やみ申し上げます。